

さんむのふるさと散歩

NO.20

伊藤左千夫生家の下を発掘

今回は、昨年11月下旬から3月下旬まで実施した伊藤左千夫生家以下、「生家」改修工事に伴い、実施した確認調査でわかった事を紹介します。

生家は、今から約250年前の江戸時代中頃に建てられました。江戸時代の伊藤家は五人組の組頭として、殿台村の村政に係わりを持つ中級農家の家柄でした。

明治16年の家相図によると、敷地の南境に、現存しない立派な長屋門が見られます。この他に、現在は庭木が生えている付近には、厩・物置・穀物用倉庫が建っていました。また、敷地の北隅には祠が祀られていたようです。母屋の構造も現在とは異なっており、外観も違っていたことでしょう。

今回の改修工事は、昭和62年に発生した千葉県東方沖地震により、母屋全体が北側に傾いたために各所に生じたゆがみを直すとともに、地震に強い構造とし、劣化した箇所を修復・整備して「千葉県指定史跡である生家」を永く後世に伝えようというものです。

耐震構造を持たせるために、礎石で柱を支える構造を改め、床下に格子目の溝を掘り(布堀と言います)溝の中にコンクリートを流し込んで、柱を支える構造としました。



この基礎工事のために、母屋全体を地面から1m程ジャッキアップして(右写真参照)その隙間に身体を潜めて手作業で布堀を掘ったのです。

布堀を掘り進めるとともに、その壁面を詳細に観察することで、生家建築に先立つ江戸時代の地業跡(建物を建てる前の整地・地固め作業が見つかりました。

この地業は上下4層・厚さ約40cmに及ぶ相当念入りなものです。(下段右端写真参照)生家が数度の大地震に耐え現存できた

理由を確認するとともに、職人の腕の確かさに関心しました。



古期の基礎

右の写真は、江戸時代〜明治頃の手法による柱の基礎です。今まで行われた数度の改修工事でこの時期の基礎はほとんど壊れていました。

この礎石は、建物構造の変化により、不要となり撤去されることなく忘れ去られたものでしょう。

礎石の根固めに大きめのハマグリを充填していますが、これと同じ方法は松尾城現在の松尾中学校から松尾高校・教習所の範囲に所在。明治2年に着工

したが、廃藩置県のため未完成の城主(松尾藩主)大田資美の主殿(住居)の基礎と同じものです。

次に今回の確認調査で出土したものについて紹介します。



ミニチュアちようし

右の写真は、底から口までの高さが7.5cmの江戸時代のミニチュアのちようしです。子どものおもちゃか地鎮祭に使用したものでしょう。



お茶碗

右の写真は口の大きさ8cm高さ4.5cmのお茶碗です。お茶碗等の食器類は江戸時代のもものが多く出土しました。



白髪ぞめ

右の写真は明治時代〜昭和時代に販売された高さ7.4cmのビン入りの白髪染めです。「君が代」という商品名が写真で確認できるでしょうか。裏面には登録商標の番号も入っています。

いつまでも若々しくいたいと思う人の心は今も昔も変わらないうです。

今回の調査に伴う図面や写真・出土遺物については、生家に隣接する歴史民俗資料館展示室で展示しています。